

日本語疑問附加部の形態、統語、意味

黒木邦彦

1 はじめに

日本語には、程度、様態、理由などに疑ひを掛ける、附加部 (adjunct)¹ 相當の疑問形式 (以下「疑問附加部」) が数多存在する。とりわけ、疑問連體詞(節²) (1) と形式名詞 (2) から成る名詞句³を含む形式 (3) は生産性に富み、枚挙に暇が無い。

- (1) a. dono ‘どの’, naN=no ‘何の’, doNna ‘どんな’, doo#{ juu / iQta / sita } ‘どう{ いふ / いった / した }’
 b. { dogai=na / donai=na / dogan / etc. } ‘どの様な’ (諸變種), { doQta / doota } ‘どういった’ (青森縣、茨城縣)
- (2) kurai ‘位’, teedo ‘程度’, kaNzi ‘感じ’, joo ‘様’, huu ‘風’, guai ‘具合’, tame ‘爲’, mokuteki ‘目的’, see ‘所爲’, okage ‘お蔭’, etc.
- (3) a. [dono#kurai]_{NP}, [naN=no#tame]_{NP}, [doNna#guai]_{NP}=ni, [[doo#juu]#kaNzi]_{NP}=de, [[doo#iQta]#mokuteki]_{NP}=de, [[dono#joo]_{NP}=ni#site]_{AdvCL}⁴
 b. [dogan#huu]_{NP}=ni ‘どんな風に’ (鹿兒島縣甑島里), [doota#huu]_{NP}=ni ‘どんな風に’ (茨城縣), doo#sita#kotii // [[doo#sita]#koto]_{NP}=ni // ‘どう#した#事=DAT → 何故’ (大分縣舊南海部郡)^{みなみあまべ}

しかし、疑問附加部の研究は、日本語に限らずとも、盛んとは言ひ難く、先行研究も統語意味論に集中してゐる。その方面では参照すべき先行研究も生まれてゐるが、研究蓄積に関して言へば、述部 (predicate) の項 (argument) を示す補部 (complement) とは比べるべくもない。

¹ 統語意味的要素たる adjunct は一般に「附加詞」と訳されるが、動詞や名詞といった語類 (word class) ではない。同じく統語意味的要素たる predicate, complement もそれ／＼「述語」「補語」と呼ばれてゐるが、必ずしも語 (word) ではない。したがって、かうした統語意味的要素は「-部」で統一する。

² 連體詞節も含めるのは、[katati=ga#doNna]_{AdvCL}#jatu ‘形がどんなやつ’ などゝ言ひ得ることに據る。なほ、筆者は、1 個の述部とそれが統べる 0 個以上の補部・附加部から成り、統語的には語と同じく振る舞ふ形式を「節 (clause)」と呼ぶ。

³ 筆者は、2 個以上の語から成り、統語的には語と同じく振る舞ふ形式を「句 (phrase)」と呼ぶ。生成文法で言ふところの句とは異なるので、注意されたい。

⁴ 統語範疇は統語境界終端の外側に subscript の略號で示す。

日本語に関して言へば、疑問附加部の形態的多様性も研究対象に値すると思はれる (cf. 黒木 2014)。しかし、日本語疑問附加部の形態論は、その形態的多様性に反して貧弱であり、基礎研究すら缺いてゐる。

そこで、筆者は、本研究計画において、日本語疑問附加部の形態、統語、意味に関する基礎研究を行なふこととした。初年度には、当該疑問附加部における形態と意味の関係 (cf. §5) に着目し、黒木 (2014) において、そこに認められる多様性および一般性を素描した。

たゞし、黒木 (2014) で取り上げた變種数はいつに過ぎず、しかも、そのうちみつつは九州方言であった。日本語諸變種を複数扱ふことで見えてきたことは少なからずあったものゝ、日本語一般の現象とまでは言ひ難く、研究の見通しを立てるに留まった。

また、黒木 (2014) は、疑問附加部研究の中では比較的進んでゐる統語意味論どころか、統語論的特徴の観察さへも缺いてゐる。先行研究に據れば、附加部ないしその構成要素に疑ひを掛ける疑問形式は、補部に對するそれとは形態統語上の振る舞ひを異にするやうであるから (cf. Murasugi 1992; Huang 1998; オルドリッジ 2015)、統語面の記述を缺いては、研究の進展は望めない。

そこで、本稿では、次の3點に関する記述を進めながら、日本語疑問附加部の形態的・統語的・意味的特徴を明らかにし、日本語疑問附加部の基礎研究と爲す。

- (4) a. 形態統語論 b. 地理的分布 c. 意味論

2 資料

議論に入る前に、本稿で示す資料を明らかにしておく。

[A] 古典語

1. 中村ほか (1982-99) や松井ほか (編) (2000-02) など (を頼りに原典) から得たもの。
2. 秀丸エディタの grep 検索を利用して、国文学研究資料館が 2016 年 1 月 29 日まで公開してゐた、『日本古典文学大系』(岩波書店、1957-67 年) の電子テキストから得たもの。

[B] 方言

1. 徳川 (監) (1989)、平山 (編) (1992-94)、国立国語研究所 (編) (1989-2006; 2001-08) などから得たもの。
2. 筆者が 2010-15 年に行なつた調査において、次の市町村 (舊名優先。特筆しない限り中心街。下線付き以外は本研究計画の予算で訪れた地) で生まれ育つた母方言話者 (99%近くが 1950 年以前の生まれ) から得たもの。

●02 青森: 青森市、舊脇野澤村、十和田市、舊蟹田町 ●05 秋田: 秋田市 ●06 山形: 山形市、酒

田市、新庄市、米澤市 ●07 福島: 福島市 ●08 茨城: 小美玉市、石岡市、結城市 ●09 栃木: 舊西那須町、舊鹽原町 ●22 静岡: 濱松市南区 ●24 三重: 松阪市、尾鷲市古江町・梶賀町、大紀町錦 ●26 京都: 京都市 ●28 兵庫: 神戸市 ●30 和歌山: 有田市、新宮市、白濱町 ●31 鳥取: 倉吉市 ●32 島根: 濱田市、美郷町濱原 ●35 山口: 舊阿東町徳佐、舊阿知須町 ●37 香川: 舊庵治町 ●39 高知: 土佐清水市、大月町 ●42 長崎: 舊口之津町 ●43 熊本: 水俣市、苓北町、舊新和町、舊牛深市深海町 ●44 大分: 日田市、舊野津町、舊緒方町、舊南海部郡 ●46 鹿児島: 長島町鷹巣、獅子島、舊高尾野町、舊高城村、舊串木野市、舊市來町、甕島里・瀬上・手打・長浜

3 形態統語論

日本語の疑問附加部を形態統語面から分類すると、斜格の擴張名詞⁵、副詞、副詞節のいづれかに該当する。

3.1 斜格の擴張名詞

次のように、斜格の擴張名詞は、名詞と斜格助詞 =ni ‘DAT’, =de ‘INST’, =to ‘COM’ から成る。

- | | | | | | | |
|-----|----|-------------------------|----|------------------------|----|------------------------|
| (5) | a. | 諸變種 | b. | 諸變種 | c. | 秋田縣 |
| | | [nani=de] _{N'} | | [nan=de] _{N'} | | [nan=to] _{N'} |
| | | 何=INST | | 何=INST | | 何=COM |
| | | 何で | | 何で; 何故 | | どう |
| | d. | 古代語 | e. | 古代語、標準語 | | |
| | | [ika=de] _{N'} | | [ika=ni] _{N'} | | |
| | | 如何=INST | | 如何=DAT | | |
| | | どうやって; 何故 | | 古: どのくらゐ、どう(やって)、なぜ | | |
| | | | | 標: どのくらゐ | | |

前述のとおり、疑問連體詞(節) (1) と形式名詞 (2) から成る名詞句を含む形式 (3) は生産性に富み、枚挙に暇が無い。たゞし、(3b) doo#sita#kotii ‘何故’ (大分縣舊南海部郡) などを除けば、殆んどの意味は構成要素から容易に算出する。よって、本稿では、(3) のような疑問附加部を二次的なものと見做し、これ以上は触れない。

⁵ 「擴張 (extended)」とは、ある語/句/節が 1 個以上の接語 (clitic) を取ってゐることを意味する。X 詞に相當する擴張語は「擴張 X 詞」と呼ぶ。なほ、筆者が設定する言語形式の単位は「[小] 語 < 句 < 節 [大]」で、語と擴張語の和集合は國文法の文節に一致する。

3.2 副詞

次のとおり、共時的に副詞であるものゝいくつかは、節を含む疑問附加詞に由来する (cf. 黒木 2014)。

(6) 副詞

- a. 16C(以前?) 近世前期上方
 ?[da-u]_{ADV} > [doo]_{ADV}
 何_れ-ADV LZ どう (cf. 柳田 1991^{2nd} 6)
- b. 8C 8C
 [nani=to]_{N'} > [nado]_{ADV}
 何=COM なぜ ((5c) と比較のこと)
- c. 10C 後 各地 19C 前江戸、各地
 [do=ga#jau]_{NP} > [dogai]_{ADV} > [donai]_{ADV}, [togaa]_{ADV}, [dokaal]_{ADV}, etc.
 何_れ=GEN#様 どの様 どの様
- d. 宮城縣、山形縣、福島縣、
 X 9C 末 Y 栃木縣、茨城縣
 *[nani=to#ip-u]_{NCL} > [nadepu]_{ADN/V} > [nadjoo]_{ADV} > [nazjo]_{ADV}
 何=COM#言_ふ-NL 何故 どう
- e. 8C 10C 後 17C 後西日本
 [nani#se-m-u]_{NCL}= { ni / to } > [nazenil]_{ADV} > [naze]_{ADV}
 何#する-IRR-NL=DAT/COM なぜに なぜ (cf. 大坪 1983)
- f. 10C 前(以前?) 12C 九州
 [nani=si=ka]_{N'} > [nazika]_{ADV} > [nasika]_{ADV}
 何=EMPH=Q なぜ なぜ
- g. 大分縣舊南海部郡 同左
 [dogee#si-te]_{ADVCL} > [dogeite]_{ADV}
 どの様#する-MED どうやって

⁶ 柳田 (1991^{2nd}: 19–23) は語彙の體系性などを考慮し、次の可能性も慎重に検討してゐる。

- (I) a. to#sita#kau#sita ‘どうした斯うした’ や to#aru#kau#aru ‘どう有る斯う有る’ といった to#V#kau#V 構文の to (tokaku, tonikaku, tomokaku などの to) が、對で用ゐられる kau ‘斯う’ に引き摺られて開音化し (cf. *nan=to=mo#ka=to=mo* ‘何ともかんととも’ > *nan=to=mo#kan=to=mo*)、tau となった。
 b. tau の語頭子音が濁音化し (cf. tare ‘誰’ > dare)、dau に合流した。

- h. 9C 末 18C 末江戸、各地
 [nani#si-te]_{AdvCL} > [nasite]_{Adv}
 何#する-MED なぜ
- i. 9C 末 19C 後江戸 各地
 [nani#si-ni]_{AdvCL} > [nasii]_{Adv} > [nasi]_{Adv}
 何#する-PURP なぜ なぜ
- j. 鹿兒島縣甌島 同左
 [naN#si-kee]_{AdvCL} > [naikee]_{Adv}
 何#する-PURP なぜ

(6c) において dogai > donai と推定する (donai > dogai としない) のは、聊か単純ではあるが、津軽方言を典型とする東北方言において、母音の直後の濁音音素が前鼻音を伴ふことに拠る (高山 1992 も参照)。

(6) の諸形式を設定するに当たっては、古文獻において、鼻音 (があったと思はれる箇所) が必ずしも「ん」で表記されないことを考慮した。ただし、濁音音素 z, d, g の直前や、(6e) naze_ni, (6h) na_site, (6i) na_sii における _ の位置には、撥音音素 N を認めるべきかもしれない。そのやうに解釈すれば、(6) に示した諸形式の變遷は、少なからず書き變へなければならなくなる。しかし、過去の日本語における N 設定の是非は現時点では判じ兼ねる上、その追究は本稿の主題ではないので、(6) のやうに考へておく。

dogai および kogai, sogai, agai (以下、指示語語根 do-, ko-, so-, a- を DEM に置き換へる) の祖形を推定するに当たっては、DEM-re=ga#jau の存在も考慮しなければならない (cf. 迫野 2002)。例へば、熊谷 (2006) は、DEM-gai の祖形を DEM-re=ga#jau に求めてゐる (DEM=ga#jau の可能性を排除してゐる譯ではないが)。ただし、筆者は次の理由から、DEM-gai の祖形を DEM=ga#jau と見てゐる。

- (7) a. 「こんがい」や「どんがい」といった假名表記に見える「ん」は、DEM-re の re が撥音化したものではなく、濁音音素 g の前鼻音とも考へ得る。
- b. DEM-re の re に当たる音聲は、熊谷 (2006) が指摘する、山口縣東部で使用されてゐる soigai のひとつめの i くらゐしか無い。

なほ、nazjo 系および dogai 系は、斜格助詞 =ni ‘DAT’ を取って、擴張副詞にもなりうるし、繫辭動詞 =da や =na で動詞にもなり得る。更に、=ni ないし/および =na を撥音化させて、nazjoN や dogeN のやうに 1 語化してゐることもある。この撥音化は dogai 系に顕著で、九州方言には、=ni も =na も撥音化させた結果、次のやうに副詞と連體詞を兼ねるやうになったものも存在する。

- (8) a. kora [[dogaN]_{ADV} su-reba]_{ADVCL} kui=ga nai=na?
 此れ:TOP どの様に する-COND 食う:NL=NOM 成る:NPST=Q
 ‘これはどうすれば食える?’
- b. omajaa [[dogaN]_{ADN} huto]_{NP=ga} jo-ka=na?
 あなた:TOP どの様な 人=NOM 良い-NPST=Q
 ‘あなたはどんな人が良い?’

3.3 副詞節

副詞節に該当する形式は次のとおり。

- | | |
|-------------------------------|--|
| (9) a. 標準語 | b. 各地 |
| [doo#jaQ-te] _{ADVCL} | [{ iken / dogai / nazjo / naN=to }#si-te] _{ADVCL} |
| どう#やる-MED | どう#する-MED |
| どうやって | どうやって ⁷ |
| c. 標準語 | d. 9C 末以降 |
| [doo#si-te] _{ADVCL} | [nani#si-ni] _{ADVCL} |
| どう#する-MED | 何#する-MED |
| なぜ | 何をしに; なぜ |

たゞし、(9) の諸形式のうち、《目的》ないし《理由》を表す (9c-d) のような形式は、形態的に (副詞節を形成する動詞で終はる點で) は副詞節に相當するものゝ、統語的にはさうではない。なぜなら、《方法》を表す (9a-b) のような形式とは異なり、補部も附加部も取り得ないからである。

- (10) a. hootoo=Qte [komugiko=o doo jaQ-te]_{ADVCL} tukur-u=no?
 ほうとう=TOP 小麥粉=ACC どう やる-MED 作る-NPST=NL
 ‘ほうとうって、小麥粉をどうやって作るの?’ 《方法》
- b. *konna toki=ni [komugiko=o doo si-te]_{ADVCL} hootoo=o tukur-u=no?
 こんな 時=DAT 小麥粉=ACC どう やる-MED ほうとう=ACC 作る-NPST=NL
 ‘こんな時に、小麥粉を何故ほうとうを作るの?’ 《理由》

⁷ iken#si-te を使ふ話者の一部は、この形式で‘何故’も表す。

3.4 中古和文語の nadepu

中古和文語の nadepu は、九州方言の dogen のやうに連體詞と副詞を兼ねる。その意味についての記述は畠山 (1972) に見られるが、注目すべきはその統語的振る舞ひである。次のやうに、nadepu は常に名詞(句)の直前に位置する。

- (11) a. [[なでふ]_{ADN} [女]_NNP が 眞名書は 讀む? (紫式部: 498)
 b. [[なでふ]_{ADN} [尼]_NNP にか なり給ふべき? (落窪、4: 228)
- (12) a. [なでふ]_{ADV} [[我が]_{ADN} [家など]_NNP 無き 所にて 御物忌み侍る? (落窪、1: 80)
 b. 今更 [なでふ]_{ADV} [[さる]_{ADN} [事]_NNP か 侍るべき? (源氏、椎本: [17] 356)

反語文 (11) の nadepu は連體詞と解釋し得るが、疑問文 (12) のそれは《理由》の疑問副詞と見るのが妥當だらう。連體詞の nadepu と副詞のそれは同時代に共存してゐるので、推定に留まるが、《理由》の疑問副詞 nadepu は、反語文における連體詞 nadepu が獨立して、副詞になったものと思はれる。

4 地理的分布

伝統方言話者 (同士による會話の機會) の減少や標準語・地域共通語の浸透に因り、日本語疑問附加部の地理的分布 (= どのような疑問附加部がどのような地域に分布してゐるか) は、現代においては見えにくゝなつてゐる。とは言へ、先行研究に當たるだけでも、次のことは指摘し得る。

- (13) a. 徳川 (監) (1989: 146) に據れば、ika 系は著しく衰退してをり、文語色の強い ika=ni を除けば、次の地域にしか見られない。筆者の調査でも、鹿児島縣北薩地方 (舊高尾野町、舊高城村、舊串木野市、舊市來町) で iken ‘どう’ を確認するに留まった。
 [16 富山] 礪波市; [32 島根] 石見; [46 鹿児島] 阿久根市、南西諸島 (屋久島など) など
- b. 徳川 (監) (1989: 1681–82) に據れば、dogai 系は、東北地方、關東地方、中部地方では殆んど使用されてゐない。逆に言へば、關西地方以西には廣く分布してゐる譯である。また、中部地方以東であっても、山形縣、千葉縣夷隅郡、東京都伊豆諸島、新潟縣佐渡島などでは使用されてゐる。

日本語疑問附加部のうち、dogai 系は次のとおり地理的變種に富む。

表 1 dogai 系の地理的変種

	dongV(N)	dogV	dogVN	dokV togV	doØV(N)	donbV	donnV(N)	donV	donVN
ai		dogai					donnai	donai	
ae	dongae	rogae							
e(e)	donge dongen	doge dogee	dogen	doke		donbee	donne donnen	done donee	doneN
ja(a)	dongja	dogja dogjaa	dogjan					donjaa	
a(a)	donga	doga dogaa	dogan rogan	togaa dokaa	da daa			dona donaa	donaN
ara	dongara								
o(V)		dogon		dokon	don			donoi dono donoo donoa	donon

徳川 (監) (1989: 1681–82) に據れば、各形式の使用地域は次のとおり (下線付きの市町村は筆者の調査結果から追加したところ)。

●**dongae**: [06 山形] 各地 ●**donge**: [06 山形] ^{にしおきたま}新庄市、西置賜郡、最上郡; [15 新潟縣] 佐渡島、中越; [39 高知] ^{はた}幡多郡 大月町; [45 宮崎] 宮崎郡など ●**dongen**: [42 長崎] 長崎市 ●**dongja**: [37 香川] ^{みとよ}三豊郡; [39 高知] 幡多郡 ●**donga**: [15 新潟] 中越; [36 徳島] 各地 ●**dongara**: [36 徳島] 三好郡 ●**dogai**: [06 山形] 各地; [15 新潟] 佐渡島; [22 静岡] 磐田郡; [26 京都] 与謝郡; [28 兵庫] 佐用郡; [30 和歌山] ^{むろ}牟婁郡; [33 岡山] 各地; [34 広島] 各地; [35 山口] 玖珂郡、大島; [38 愛媛] 各地; [40 福岡] 企救郡; [44 大分] 大分郡 (下流) ●**rogae**: [30 和歌山] 西牟婁郡 ●**doge**: [06 山形] ^{にしおきたま}新庄市など; [12 千葉] 夷隅郡; [13 東京] 御蔵島; [15 新潟] 佐渡島; [23 愛知] ^{へきかい}碧海郡; [24 三重] 志摩郡; [30 和歌山] 各地; [31 鳥取] ^{さいはく}西伯郡、日野郡; [32 島根] 出雲、隠岐島; [40 福岡] 各地; [41 佐賀] 各地; [42 長崎] 對馬、壱岐島; [43 熊本] 阿蘇郡; [44 大分] 各地; [45 宮崎] ^{にしうすき}西臼杵郡; [46 鹿兒島] ●**dogee**: [06 山形] 庄内; [12 千葉] 夷隅郡; [13 東京] 御蔵島; [15 新潟] 佐渡島; [23 愛知] 碧海郡、岡崎市; [28 兵庫] 赤穂郡; [32 島根] 仁多郡; [40 福岡] 各地; [42 長崎] 各地; [43 熊本] 阿蘇郡 ●**dogen**: [12 千葉] 夷隅郡; [15 新潟] 佐渡島; [23 愛知] 碧海郡; [24 三重] 志摩郡; [32 島根] 出雲、隠岐島; [39 高知] ^{みなみたかき}土佐清水市; [40 福岡] 各地; [42 長崎] ^{みなみたかき}南高来郡; [43 熊本] 水俣市、阿蘇郡; [44 大分] 大野郡; [45 宮崎] 都城市; [46 鹿兒島] 北薩、甕島 (里・中野・平良以外) など ●**dogja**: [32 島根] ^{やつか}八束郡; [43 熊本] ^{しもましき}下益城郡 ●**dogjaa**: [12 千葉] 夷隅郡; [31 鳥取] 各地; [32 島根] 隠岐島; [42 長崎] ^{ひがしそぎ}東彼杵郡; [43 熊本] 下益城郡 ●**doga**: [06 山形] 米澤市、南置賜郡; [25 滋賀] 東浅井郡; [30 和歌山] 日高郡; [31 鳥取] ^{いはみ}倉吉市、岩美郡、西伯郡; [32 島根] 太田市、隠岐島; [37 香川] 與島 ●**dogaa**: [06 山梨] ^{みなみこま}南巨摩郡; [32 島根] 石見; [33 岡山] 各地; [34 広島] 各地; [35 山口] 阿武郡、玖珂郡; [44 大分] 北海部郡; [46 鹿兒島] 種

子島 ●dogjan: [26 京都] 各地; [32 島根] 出雲; [40 福岡] 三井郡; [41 佐賀] ^{まだらとう}馬渡島、神埼郡; [42 長崎] 中流以下; [43 熊本] 各地 ●dogan: [13 東京] 八丈島; [33 岡山] 上房郡、吉備郡; [34 広島] 高田郡; [37 香川] 各地; [42 長崎] 各地; [43 熊本] 天草; [46 鹿兒島] 甑島里・中野・平良、種子島 ●rogan: [46 鹿兒島] 種子島 ●dogon: [13 東京] 八丈島 ●doke: [24 三重] 志摩郡; [32 島根] 出雲 ●dokaa: [33 岡山] 小田郡 ●togaa: [13 東京] 八丈島 ●dokon: [13 東京] 八丈島 ●da: [26 京都] 葛野郡 ●daa: [18 福井] ^{おにゅう}遠敷郡 ●don: [24 三重] ^{わたらひ}度會郡; [25 滋賀] 彦根市 ●donbee: [02 青森] 上北郡 ●donnai: [22 静岡] 志太郡など ●donne: [17 石川] 金澤市、石川郡; [21 岐阜] ^{ぐじやう}郡上郡 ●donnen: [24 三重] 伊賀市 ●donnee: [19 山梨] 各地; [20 長野] 上田市、諏訪郡 ●donai: [16 富山] 各地; [18 福井] 遠敷郡; [21 岐阜] ^{よしき}吉城郡; [23 愛知] 各地; [24 三重] 松阪市、尾鷲市古江町・梶賀町、北牟婁郡; [25 滋賀] 神崎郡; 彦根市; [26 京都府] 各地; [27 大阪] 大阪市、泉北郡; [28 兵庫] 各地; [29 奈良] 南部; [30 和歌山] 各地; [33 岡山] 眞庭郡、苫田郡; [34 広島] 各地; [36 徳島] 各地; [37 香川] 各地; [38 愛媛] 各地; [39 高知] 各地 ●done: [22 静岡] ^{みなみしたら}南設楽郡; [24 三重] 度會郡、宇治山田市; [29 奈良] 各地 ●donee: [23 愛知] 岡崎市、名古屋市; [28 兵庫] 赤穂郡; [32 島根] 石見; [33 岡山] 各地; [34 広島] 各地; [35 山口] 阿東町、阿知須町など; [42 長崎] 對馬 ●donjaa: [28 兵庫] 城崎郡; [33 岡山] 備中 ●dona: [15 新潟] ^{にしくびき}西頸城郡; [36 徳島] 各地; [37 香川] 各地; [38 愛媛] ^{しゅうさう}周桑郡; [39 高知] 幡多郡 ●donaa: [38 愛媛] 周桑郡 ●donoi: [31 鳥取] 東部; [39 高知] 各地; [42 長崎] 南高來郡 ●dono: [06 山形] 庄内; [26 京都] 葛野郡 ●donoo: [15 新潟] 佐渡島 ●donoa: [17 石川] 輪島市 ●donen: [29 奈良] 吉野郡 ●donan: [37 香川] 各地 ●donon: [15 新潟] 佐渡島

5 意味論

5.1 《程度、様態》と《理由》を兼ねる疑問附加部

中古和文語は、《程度、様態》と《理由》を兼ねる疑問附加部 *ika=ni* を有する点で特徴的である。標準語の疑問付加部を形式と意味の両面から分類すると、[表 2] のようになる。

表 2 中古和文語の疑問附加部

	程度	道具	資格	様態	方法	目的	理由
[ika=ni] _{N'}	✓			✓	✓		✓
[nani=ni=te] _{N'}		✓	✓				
[ika=de] _{N'}					✓		✓
[nani#sini] _{AdvCL}						✓	
[nado] _{Adv}							✓
[nadepu] _{ADN/V}							✓

それ／＼の具體例は次のとおり。

- (14) a. 「いかに 近からむ」と 思ひつるを されど け遠かりけり。
(源氏、帚木: [14] 93) 《程度》
- b. ((その女は)) 上にも 聞し召しおきて 「((その女を)) 宮仕へに 出だしたてむ」と 漏らし奏せし 「((その女は)) いかに なりにけむ」と いつぞや宣はせし。
(源氏、帚木: [14] 91-92) 《状態》
- c. かの 人も 「いかに 思ふらむ」と いとほしけれど
(源氏、空蟬: [14] 119-20) 《内容》
- d. 君は 「いかに 謀りなさむ」と まだ 幼きを 後ろめたく 待ち臥し給へるに ((小君が)) 不用なる 由を 聞こゆれば
(源氏、帚木: [14] 105) 《方法》
- e. ((父)) 「いかに かく 籠りおはします。 ((中略))」。少將 「あな かしこ。何か つきなき ことも 侍らず。日頃 乱り心地の 例にも 似ず 侍れば 内裏の 方にも 参らで 籠り侍るなり」。
(うつほ、嵯峨院: [10] 255) 《理由》
- (15) a. 手 無くば 何にてか 木の 実 葛の 根をも 掘らむ。
(うつほ、俊蔭: [10] 80) 《道具》
- b. 衛門 「三郎君と 聞こえしは 今は 何にてか おはすらむ? 御冠や し給へる?」 ((侍従の君)) 「しか／＼ この 春なむ 大夫と 言ふめる」
(落窪、3: 181) 《資格》
- (16) a. 天竺に 二と 無き 鉢を 百千萬里の 程 行きたりとも いかでか 取るべき?
(竹取: 34) 《方法》
- b. 「かうまでも いかで 聞えじ」と 思へど 「上の 御心に 背く」と 聞こし召すらむ ことの 安からず いぶせきを 「こゝにだにも 聞え知らせでやは」とて なむ。
(源氏、若菜下: [16] 406) 《理由》
- (17) a. ((童)) 「何しに この 山には あるぞ」と 問へば ((俊陰)) 「魚釣りに 來つるぞ。 御許に 食はせ奉らむとて」と 言へば
(うつほ、俊陰: [10] 77) 《目的》
- b. ((かぐや姫)) 「こゝに 心にも あらで かく 罷るに 昇らむをだに 見送り給へ」と 言へども ((翁)) 「何しに 悲しきに 見送り奉らむ。 我を いかに せよとて 捨てゝは 昇り給ふぞ。 具して 出おはせね」と 泣きて 伏せれば 心惑ひぬ。
(竹取: 64) 《理由》
- (18) 答へも せで 居たるを ((男)) 「など 答へも せぬ」と 言へば ((女)) 「涙の 零るゝに 目も 見えず 物も 言はれず」と 言ふ。 (伊勢、62: 145) 《理由》
- (19) ((落窪)) 「今日 明日 御物忌に 侍る」と 答ふれば ((北の方)) 「あら こと／＼

し。 なでふ 我が 家など 無き 所にて 御物忌 侍る」と 宣へば
(落窪、1: 79) 《理由》

黒木 (2014: §4) では、今後の展望として、中古和文語の *ika=ni* のやうに《程度、様態》と《理由》を兼ねるものは稀だらうと推測した。本稿では、今年度までの調査結果 (調査地点は§2: [B2] を参照) に基づき、この推測どほり、《程度、様態》と《理由》を兼ねる疑問附加部は稀少と結論附ける。

なほ、(15b) *nani=ni=te* のやうな《資格》の疑問附加部は、現代語からは得られなかった。このことを踏まえるに、《資格》の表現は、(15b) に挙げる *N=OBL#ar-* 型から { *N(=ACC) / doo* } *#si-te-* 型 (e.g. [*ima=no#kaisja*]=*de=wa#nani#si-te-ru=no?* ‘今の会社では何してるの?’; *saikin#doo#si-te-ta?* ‘最近どうしてた?’) に變化したやうである。

5.2 《理由》の疑問附加部の發生徑路

黒木 (2014: §3) で指摘したやうに、《理由》の疑問附加部は《方法》ないし《目的》のそれに由來する。

- (20) a. 9C 末 18C 末江戸、各地

[*nani#si-te*]_{ADVCL} > [*nasite*]_{ADV}

何#する-MED なぜ

方法 理由

- b. 9C 末 19C 後江戸 各地

[*nani#si-ni*]_{ADVCL} > [*nasii*]_{ADV} > [*nasi*]_{ADV}

何#する-PURP なぜ なぜ

目的 理由 理由

- c. 鹿兒島縣甌島 同左

[*naN#si-kee*]_{ADVCL} > [*naikee*]_{ADV}

何#する-PURP なぜ

目的 理由

((6h-j) を再掲)

§3.4 で取り上げた *nadepu* の變化 (推定) を踏まえるに、反語文の要素から《理由》の疑問附加部へといふ徑路も考へられる。

6 まとめ

最後に、本稿で明らかにしたことを纏めると、次のとおり。

- (21) a. 疑問附加詞として用ゐられる要素のうち、共時的に副詞であるものゝいくつかは、節を含む疑問附加詞に由来する (§3.2)。
- b. 《理由》の疑問副詞 *nadepu* は、反語文における連體詞 *nadepu* が独立して、副詞になったものと思はれる (§3.4)。
- c. *ika* 系は著しく衰退してをり、文語色の強い *ika=ni* を除けば、鹿児島縣などには見られない (§4: (13b))。
- d. *dogai* 系は關西地方以西に廣く分布してゐる (§4: (13b))。
- e. 《資格》の表現は、*N=OBL#ar-* 型から { *N(=ACC) / doo* }*#si-te-* 型に変化したやうである (§5.1)。

記號一覽

˘: 音節境界 -: 接辞 (= 附属形式) 境界 =: 接語 (= 附属語) 境界 +: 語幹境界 #: 統語的語境界
[]: 語/句/節境界 //:: 基底表記 (X): X は選択要素 X/Y: X ないし Y { X / YZ }: X ないし YZ *: 文法的に不適格 **: 再構形

略號一覽

˘: 擴張 (extended) ADN: 連體詞 ADV: 副詞 CL: 節 N: 名詞 P: 句 V: 動詞
ACC: 對格 COM: 共-様-引用格 COND: 條件 DAT: 與-格-處-様格 EMPH: 強調 GEN: 屬-主格 INST: 具-處格 IRR: 非現實 MED: 連結 NL: 準體 NL: 準體-連體 NOM: 主-屬格 NPST: 非過去 OBL: 斜格 PST: 過去 PURP: 目的 Q: 疑問 TOP: 主題 (機能形態素の意味のうち、多義的なものは大文字で表す)

参考文献

- エディス オルドリッジ (2015)「上代日本語における疑問詞の位置について」、『國語研プロジェクト レビュー』、Vol. 5-3、pp. 122-34、国立國語研究所
- 大坪 併治 (1983)「漢文訓読文におけるナゼニの成立をめぐって」、『國語學』132、pp. 1-10、國語學會
- 熊谷 政人 (2006)「「レ系指示詞+ガヤウ」考」、『語文研究』102、pp. 36-45、九州大學國語國文學會
- 黒木 邦彦 (2014)「日本語の疑問付加部の構造と意味に見られる一般性」、『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書』1、pp. 69-77、国立國語研究所
- 国立國語研究所 (編) (2001-08)『日本のふるさとことば集成』1-20、國書刊行會
- 国立國語研究所 (編) (1989-2006)『方言文法全国地図』1-5、財務省印刷局
- 迫野 虔徳 (2002)「指示詞におけるコソアド体系の整備」、『語文研究』94、pp. 1-12、九州大學國語國文學會
- 高山 倫明 (1992)「清濁小考」、田島 毓堂・丹羽 一彌 (編)『日本語論究 2 古典日本語と辞書』、pp. 17-56、和泉書院
- 徳川 宗賢 (監)、徳川 宗賢・佐藤 亮一 (編) (1989)『日本方言大辞典』上・下・別巻、小學館
- 中村 幸彦・岡見 正雄・阪倉 篤義 (編) (1982-99)『角川古語大辞典』1-5、角川書店
- 畠山 義和 (1972)「『源氏物語』中心に見る疑問詞の扱い」、『湘南文學』5-6、pp. 69-82、東海大學日本文學會

平山 輝男 (編) (1992-94) 『日本方言大辞典』 1-8・補巻、明治書院

松井 栄一・林 大ほか (編) (2000-02) 『日本国語大辞典 第二版』 1-13・別巻、小學館

柳田 征司 [1978] (1991^{2nd}) 「第一節 『ドウ』(如何) の成立」、『室町時代語資料による基本語詞の研究』、pp. 1-28、武蔵野書院

Huang, C.-T. James. (1998). *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*. Revision of the author's Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology, 1982. New York: Garland.

Murasugi, Keiko. (1992). Locative/temporal vs. manner/reason phrases. 金城学院大学論集: 英米文学編. Vol. 33. pp. 153-70. Nagoya: 金城学院大学.

ほたるがいけ

くろき くにひこ (神戸松蔭女子学院大学; 螢池言語研究所)

E-mail: nihon5_no_ken9@yahoo.co.jp

HP: <http://hotarugaikegengokenkyuuzyo.web.fc2.com/>